月刊

こころのとも

第十二巻
七月号

教育における義務化

教育改革の一歩として
奉仕活動を
義務化するという

その前に
先生や仲間との挨拶を
義務化したらどうですか

掃除をきっちりすることを
義務化したらどうですか

規則を
ちゃんと守ることを
義務化したら
どうですか

個性教育は比較教育

個性教育を
すればするほど
他人と比べたくなり
優越感を抱きたくなる

なんと深い矛盾を
含んでいることか

人生を考え直して

みたい人は（九〇）

―『正法眼蔵』解説（三四）―

仏性の巻を続けます。

尽界はすべて客塵（かくじん）なし、直下（じきげ）さらに第二人あらず。直截根源人未識（じきせつこんげんにんみしき）、忙忙業識幾時休（ぼうぼうごっしきじきゅう）〔直に根源を截（き）るも人未だ識らず、忙々たる業識（ごっしき）幾時か休す〕なるがゆゑに。妄縁起の有にあらず、偏界不曽蔵（ふぞうぞう）のゆゑに。偏界不曽蔵といふは、かならずしも満界是有（ぜう）といふにあらざるなり。偏界我有は外道の邪見なり。本有の有にあらず、亙古亙今（ごうこごうこん）のゆゑに。始起の有にあらず、不受一塵（ふじゅいちじん）のゆゑに。条条の有にあらず、合取（がっしゅ）のゆゑに。無始有の有にあらず、是什麼物恁麼来（ぜしもぶついんもらい）のゆゑに。始起有の有にあらず、平常心是道のゆゑに。まさにしるべし、悉有中に衆生快便難逢なり。悉有を会取（えしゃ）することかくのごとくなれば、悉有それ透体脱落なり。

前回に続いて、現代語訳として増谷文雄著『現代語訳正法眼蔵第二巻』（角川書店刊）を引用させて頂きます。

すべてこの世界にはまったく外より来るものはない。ずばりいえば、べつに第二の人があるわけではない。ただ、「直ちに根源を切断することを知らず、あれこれと妄想を逞しうして休む」の時がないのである。「偏界かつて蔵さず」という。妄情によってなる存在などあろう筈もないのである。

だが、「偏界かつて蔵さず」というのは、かならずしも「一切世界はわが有」ということではない。それは外道のまちがった所見である。だからといって、また本有の有でもない。それは古今にわたっての存在であるからである。また、始めて起これる有でもない。「一塵をも受けず」であるからである。また、突如として出現する有でもない。それは凡人も聖者もともにおなじく有するがゆえにである。あるいは、始めのない有でもない。だから「こんな物がどうして来たのだ」という。あるいは、ある時はじめて存する有でもない。だから「平常心これ道」

というのである。つまるところ、悉有というは、快よき便の捉えどころがないようなものであって、そのように会得すれば、悉有は気持ち良く身体を通り抜けて脱落してゆくのである。

先月号とは違って、少し難しいように思えます。なにしろ、内容よりも、ことば一つひとつが、難しいと思います。

まず、出だしの「尽界はすべて客塵なし、直下さらに第二人あらず」が、なかなか理解でき難いようです。尽界は何度も出てきましたが、「尽十方界」の略で、宇宙全体のことです。「客塵」ですが、この言葉を聞きますと、私は「心性本浄　客塵煩悩」を思い出します。この意味は、心は本来、清いものであって、塵のように、外から来て、この清い心をけがすのが煩悩だということです。次の「直下」は、そのまま、直ちに、という意味です。そうしますと、この部分は「宇宙全体に、こうした客塵がなく、そのままで、第二の人がいない」ということになります。この部分は、言葉の意味は大して難しくないのですが、何を言っているのかが、なかなか理解しにくいようです。

私の体験で言いますと、これは、正に「解脱の心境」そのものを言っているのだと思います。

真言密教の修法（しゅほう＝体系的な冥想法）の中で、「この宇宙の中心に自分がただ一人、仏と一体となって坐していて、そこには煩悩を引き起こすような塵もなく、他に何者も一切存在しない」という境地です。これを、釈尊の言葉で言いますと、「天上天下　唯我独尊」ということになると思います。

次の漢文の「直截根源人未識（じきせつこんげんにんみしき）、忙忙業識幾時休（ぼうぼうごっしききじきゅう）〔直に根源を截（き）るも人未だ識らず、忙々たる業識（ごっしき）幾時か休す〕」ですが、この意味は、右のような心境があるのに、「ただちに（迷いの）根源を断ち切ることを、人は未だ識らない。測り知れない業の意識はいつ休止するのか」ということです。

今回取り上げました部分は、前回の続きで、「悉有」について述べています。そしてここでは、この「悉有」は、次のような有ではない、といっています。つまり①妄縁起の有、②本有の有、③始起の有、④条条の有、⑤無始有の有、⑥始起有の有、です。前回も、始有、本有、妙有、縁有、妄有などではない、という事でしたが、ここでも繰り返して、ほぼ同様のことを述べています。

個々に問題とする有を超えて、共通に言いたいことは、前回と同様に、悉有はどんな条件も付かない、絶対的な

有だということです。

そして、それらのそれぞれについて理由が述べられます。①偏界不曾蔵だから、②亙古亙今だから、③不受一塵だから、④合取だから、⑤是什麼物恁麼来だから、⑥平常心是道だから、ということです。これらの理由は、したがって、悉有そのものを表すものだ、ということができます。

ということは、これらの理由を述べる後半の言葉の方が、「妄縁起の有」といったように、「是れ是れの有」という前半の言葉以上に、難しいものになってきます。道元の知識の豊富さが、脈々と伝わってきます。順次、解説して行きます。

まず、①偏界不曾蔵ですが、読み下しは、「偏界かつて蔵（かく）さず」です。意味は「全世界にひろくゆきわたり、いまだかつて蔵（かく）されたことがない」ということで、仏教の説く真理は、少しも隠されることがない、ということです。ということは、あらゆるものすべてが、すべて真理そのものを示している、ということです。これは、老子の言葉に即して言いますと、そうだからこそ「知ること無くして、知らざること無し（無為而無不為→為＝知）」という境地に到れるということになると思います。

次に、②亙古亙今ですが、これは、古今にわたること、つまり、永久に変わらないことを意味します。心境で言いますと「もう釈尊と同じ時代からずっと生きていて、今後も生きつづけるだろう」ということですし、また、抽象的ですが、別の言葉で言いますと、永遠の今を生きている、つまり過去と未来を完全に統合した今を「ただひたすら」生きている、ということです。

次に、③不受一塵ですが、これは、「いちじんをうけず」と読みます。多くの場合に「不受一塵　不捨一法」と成語にして用いられます。大悟の境地に立ってみますと、迷いとして忌むべきものもなく、また、さとりとして求めるものもない、ということです。つまり、現実世界の事物はすべて仏にほかならないという境地です。

次に、④合取ですが、これは、積極的に一まとめになっているもの、積極的により集まって成立しているもの、ということです。私の体験で言いますと、自分のはからいを超えて無意識のうちに、仏と一体となっている（入我我入と呼ぶ）、ということです。

次に、⑤是什麼物恁麼来ですが、これは前々回に出てきました。それは「なにもの（什麼物）かこのように来る（恁麼来）」ということで、私が言っています無意識に宿られる如来さまということです。文字通りに、如来

とは「かくの如く来る」ということだからです。

次に、⑥平常心是道ですが、普段の心がそのまま道、つまり「悟り」だ、ということです。つまり、悟った人には、別に、悟りの心があるわけではなく、日頃の心そのままが、悟りだということです。前述の③不受一塵の解説と関連しています。

これらの六つは、すべて悉有の別の言い方だということです。それは、繰り返しになりますが、絶対・無限・永遠であって、右のように言葉で表現していますが、言葉では捉えられず、ただ、仮に言ってみているだけだということです。本当は、体験だけで知ることができるもの、ということなのです。

人間が動物から進化して人間になった時、人間だけが、こうした体験を通じて、相対なものの中で、絶対な境地に達する道を与えられたのです。でも、その反対に、そうならないとき、あるいは、そうした人に則らないで生きているとき、必然的に滅亡への道を突進せざるを得ない悲しみをも背負っているのです。

次に進みます。

これまでに解説したところで残っていますのは「偏界不曽蔵といふは、かならずしも満界是有（ぜう）といふにあらざるなり。偏界我有は外道の邪見なり」ですが、ここで言いたいことは、「論理的に逆は必ずしも真ならず」ということです。仏法が隠されず全世界に現れているということが、全世界に森羅万象が何でも存在しているわけではないし、また、ですから、全世界に私が存在していると言うのも、外道の考え方になる、ということです。

最後のところです。

「まさにしるべし、悉有中に衆生快便難逢なり。悉有を会取（えしゃ）することかくのごとくなれば、悉有それ透体脱落なり」の部分です。この部分も結構難しいようです。次のように解釈したらどうかと思います。

悉有である（＝仏性を宿した）衆生なのですが、以上の①～⑥のような「快い便り」に逢うことは難しいのです。もし、このように「悉有」をよく了解することができるならば、悉有（衆生）は、まさに「残すところのない解脱」を得たと言えるのです。

〔お断り〕「偏界」が頻繁に出てきましたが、この偏は原文では「にんべん」ではなく、「ぎょうにんべん」です。私が使用しますワープロの辞書に入っていませんので、しかたなく「にんべん」のもので代用させて頂きました。申し訳ありません。

自作詩短歌等選

できる子・できない子

文部科学省が
できる子には
高度な授業を
受けさせる方針
という

できない子にも
できる子にも
同じ授業をしてきた
これまでのやり方が
おかしい

当然
できる子には
できるように
できない子には
できないように
教えるべきである

耐える力の減退

最近になって
ＰＴＳＤ
心的外傷後ストレス障害
が
大きな問題となっている

それは
いま多くの人が
信仰・宗教を失い
他己を萎縮させて
社会定位に不全を起こし
ストレスに耐える力を
とても弱めている
ということ

本末転倒

ある評論家は
「現在の孤独感の
深まりは
人間関係に対して
まともな渇きを
抱えている証拠だ」
という

これは
本末転倒だ

人間は
人間と関係を持つ時だけ
こころの渇きを
癒すことができるのだ

それができないから
現代人に孤独感が
強まっているのだ

闇の中の真実

人は
意識の
闇な中で
生まれ
闇の中で
死んでいく

だから
真実は
闇の中にしかない

暗い
闇の中に
明るい
真実があるのだ

民主主義の国・米国

いまアメリカが
世界でもっとも
利己的な国となり
エゴの無限な拡大を
求めている

自由競争
市場原理至上主義
グローバリゼーション

独り勝ち主義
世界で一番強力な国
世界で一番豊かな国
広くて冷暖房完備の
　　快適な「家」
大きくて贅沢な「車」
多くの美味しい「肉」
最新武装を誇る「軍」

地球温暖化なんのその
アメリカの経済的利益と
選好が最優先
他国がどうなろうと
自国の利益・選好を
どこまでも追求する
まさに民主主義の国
アメリカ
でも情けないことに
この真似を
したがっている日本

教員再教育

大阪府教委は
職種変更や
免職も辞さない
厳しい教員の
管理体制を
敷こうとしている

管理のみで
教員の資質・人格が
向上するとは
とても思えないが
これほど荒廃した
教員のこころを
立て直すには
まず管理が要る

そしてその後で
必要不可欠なのは
こころを磨き育てる
教員再教育である

人多き
人の中にも
人ぞなき
人になれ人
人になせ人

これほど
すばらしい仕事はない

自作随筆選

家族は人間には適さない?!

かつて、「現代人のシングル指向」と題しまして、毎日新聞の「新世紀の思考　第2部　緩やかなきずな」欄に載せられた記事をめぐって、随筆を書きましたが、同欄に今回もとても気になる記事がありましたので、ここで取り上げさせて頂きます。

それは「家族幻想の崩壊で直面を強いられる『必要』と『束縛』の二律背反」と題する記事で、書かれたのは精神分析が専門で、和光大学教授の岸田秀氏です。同氏は、有名な人で、調べてみましたら私の書庫にも4冊の著書がありました。

この記事の出だしには、次のような記述があります。

「‥‥人間の家族は本能に基づいたものではなく、人間が発明した制度であって、場所によってそれぞれ異なっており、また時代によって変化する。／人間以外の動物も、種によっては一時的に家族をつくったりするが、それは人間の家族とは根本的に違い、本能に基づき、本能の目的（種族保存と個体保存）に適合している。」

驚きました。

人間に本能があるかどうかの議論は、さて、置くとしても、動物の家族（群れ？）は、「種族・個体の保存」という本能的な目的に適合しているが、人間の家族は、「本能」に基づかないので人間の（生きるという）目的には適合しない、ということのようですが、これは、まったく人間の本性（本能の代わりに使います）とは、何かが分かっていない議論だと思います。

人間の生きる意味は、動物のように、単なる「種族・個体の保存」という本能的な目的の中にのみあるわけではありません。

人間には、自らが生きようとする、つまり動物に即していいますと「種族・個体の保存の本能」の他に、「ひとの心を感じるこころ」、つまり、人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみとする「こころ」をもっているのです。私は、そのこころのことを「他己」と呼んでいますが、これは、動物にはない心です。人間が、動物から人間に進化したとき、獲得した（あるいは神・仏さまから頂いた）ものなのです。

人間が、子どもに恵まれたとき、その子を愛情をもって育てることは、なにも「種族・個体の保存の本能」でやっているわけではありません。人間が人間のあかしと

して、その子に愛情を掛けて、自分と同じような存在として育てているのです。

中頃には、次のような文章があります。

「要するに、人間にとって、家族は、現実的保護のためにも精神的安定のためにも必要不可欠である。しかし、人間の家族は、動物の家族が動物に適しているようには人間に適してはおらず、不自然なつくりものであるから、あちこち無理があり、ともすれば崩壊するのは避けがたい。人間にとって、家族は、束縛であり、圧迫である。かいつまんで言えば、家族は、なければ困るし、あれば邪魔になるという厄介な代物なのである。家族は、自我を支えると同時に自我を押し潰（つぶ）す。」

この文章を読みますと、この方は、私の言う「自己」しかないのではないのかと思えてしまいます。

自分が他者を支えていく、自分が生きていくと同じように、他者を生かしていく、という考えは全くないように思えます。日本人の大多数が、いま、このようになっているのだと思います。

自分が他者を愛することは考えられません。他者が自分を愛してくれることばかりを考えているのです。「自我」を捨てて（自我没却）、他者のために愛を注ぐ（慈悲寛大）ことは、まったく頭に無い、ということです。

釈尊のことば（一〇二）

―法句経解説―

（三三五）この世において執着のもとであるこのうずく愛欲のなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。――雨が降ったあとにはビーラナ草がはびこるように。

難しい表現はまったくありません。読むままです。

「執着のもとであるこのうずく愛欲」ですが、現代も、釈尊の時代とちっとも変わっていないように思えます。いやいや、うっかりしていました。現代はますます愛欲が増大してきているように思えます。

いま私が住んでいます近所に、折々の地域のより集まりで、自分の生き甲斐は「おんな」だ、といつも公言されている方があります。そんなにあけすけに本音が言えて、とくな性格だなあ、と皆から言われたりしています。実際に、この方がこの公言を実行に移して、浮気をしているフシはありませんし、確かにまじめでよく働き、気のよい方なのですが、私は、聞いていて、うなずく気にはなりません。

この方は農業に専従している方で、朝からお酒を飲ん

でいますが、お酒以外に欲望の追求で足らないのは、なるほど、愛欲なのだと納得できます。

先日も、道での立ち話でのことなのですが、「あんたほど所得があれば、俺なら三号か四号ぐらいつくるよ」と言われてしまいました。奥さんに聞こえますよ、とつい言いましたが、気にされる様子はありませんでした。

この方は、口でいうだけで、決して実行はしませんが、現代では、多くの人が思うだけではなく、チャンスがあれば、実行に移している人も多いのではないでしょうか。

もし、こうした愛欲を実行に移せば「もろもろの憂いが増大する」ということになります。「もろもろの憂いとは何か」ですが、さまざまなものが考えられると思います。

エイズなど性病への感染かもしれませんし、あるいは、家庭の崩壊かもしれません。お返しのように連れ合いのオアイコの浮気かもしれませんし、あるいは、そうした親の行動を見て育った、子どもの復讐かもしれません。つまり、親に輪か掛けた放蕩のお返しか、逆に、まったく男（あるいは女）への無関心・不適応のお返しかもしれません。恨みをかった刃傷ざたかも知れませんし、あるいは経済的な破綻かもしれません。多くの人たちからの軽蔑の眼かもしれませんし、あるいは、人々のこころの離反による孤独への陥落かもしれません。

こうして数えていけばきりがないほど、憂いがあると思います。もっと言いますと、自分の生きている間には起こらないかもしれませんが、後世における子孫の滅亡なのかもしれません。

現代は、愛欲の追求が一つの生き甲斐として、追求さえされている感がありますが、それは、どこまでも悪であることを、この偈は示してくれています。

（三三六）この世において如何（いかん）ともし難いこのうずく愛欲を断ったならば、憂いはその人から消え失せる。――水の滴（しずく）が蓮華から落ちるように。

前の偈と対（つい）をなしています。

釈尊も若い弟子たちの「いかんともし難いこのうずく愛欲」を制御することの難しさを、つねに感じておられたのかもしれません。

しかし、それを断ち切ったならば、あたかも「水のしずくが蓮華から落ちるように」、憂いはその人から消え失せるとは、なんとすばらしいことでしょうか。現代人も、もっとこの価値を、尊重したらよいのにと思わずに

おれません。

（三三七）さあ、みなさんに告げます。――ここに集まったみなさんに幸あれ。欲望の根を掘れ。――〔香（かぐわ）しい〕ウシーラ根を求める人がビーラナ草を掘るように。葦が激流に砕かれるように、魔にしばしば砕かれてはならない。

前二つの偈と内容的には同じことをいっている、と思います。ただこの偈では愛欲が欲望に変わっています。

たびたび述べていますように、私の「人間精神の心理学モデル」では、意識領域の最も基礎をなしますのは、情動－感情（こころ）の働きです。欲望はこの「情動」に含まれます。情動にはこの他に、快苦・喜怒哀楽のような「情緒」と、これらより時間的にもっと長く続き、情緒の背景ともなる「気分」とが含まれます。また、欲望には、三つの主要なものがあります。それらは①性欲（子孫の繁栄欲を含む）、②食欲（物欲・金銭欲などを含む）、③優越欲（権力欲・支配欲などを含む）です。

こうした欲望の根を掘れ、ということですが、「根を掘る」とは何を言っているのでしょうか。

結論的ですが、欲望が意識してコントロールすることができにくいことを、表現したのではないかと思います。

例えば、時間が経てば、いくらお腹をへらすまいと意識しても、食欲は勝手に起こってきます。

ですから、いくら食欲を満たしてみても、満たしたその時からすでに空腹は始まっていると言えます。それは、いわば生理的欲求とも言えるものです。ですから、欲望はどれほど十分満たそうとも果てしがないのです。欲望へのうづきは、満たすことでは解決できません。

では、どうすればよいのでしょうか。

そこに「根を掘る」という表現がいるのです。それは、生理的欲求が起こらなくすることではありません。そんなことをすれば、人間はお腹が空かなくなり、ものを食べることができなくなって、死を迎えることになります。そうではありません。意識してではなく無意識のうちに、そうした食欲に執着しなくてもよいように、修行するのです。それは、自己と他己の無意識の統合をなし遂げることでもあります。それが「根を掘る」ということなのです。つまり、無意識という根を掘って耕すのです。

こうなりますと、自己の情動（欲望・情緒・気分）に執着しなくてもよくなります。この偈にありますように、「魔にしばしば砕かれ」ることがなくなるのです。執着しようという気がなくなって行くのです。

後記

一、とても暑い日があったかと思えば、急に強い雨の日があったりで、今年は、雑草がとてもよく伸びます。

二、お蔭様で、育てていますカヤがぐんぐんと背丈を伸ばしています。もう私と背比べできるほどのものも結構あります。

三、でも、そう喜んでばかりは居れません。他の雑草もあっという間に伸びてきます。三日にあけず草刈りをしています。こちらを刈れば、あちらが伸び、あちらを刈れば、こちらが伸びる、といった調子です。

四、畑の池も満水です。増水した直後、鯉（こい）が岸辺に近づいて来て、草でしょうか、パクパク大きな口を開けて食べています。四〇（センチ）はありそうなのが何匹かいます。池には他に、ブラックバス、ゴリ、メダカ、エビ、カニ、フナなどがいます。昨年、別の池でとって入れたタニシも見えました。水質改善できるのでは、と思って同時に入れたカラス貝は、まだいるかどうか確認できていません。水質は目立っては、よくなっていませんし。

五、畑のジャガイモを全部、堀りあげました。今年は、とてもよくできていました。一昨年、レンゲを蒔き、昨年は大豆を植えたところで、土地は決して肥えてはいなかったのですが、そうした土地の履歴が良かったのかもしれません。また、ケイフンを元肥と追肥にやり、三度も土寄せをしましたので、それがよかったのかもしれません。

六、植えていたサツマ芋の追肥・土寄せをし、大きくなっているカヤを刈り取り、かいばきり（おしぎり）で切って、一面にばらまきました。収穫時には、完全に腐って有機質肥料になっています。また、まいた草の下では、沢山のミミズがわいて土地を肥やしてくれます。

七、大豆の苗床をつくり三合（約四五〇グラム）の種を蒔き、少し大きくなって定植しました。豆の根は強いのですが、天気がよすぎて、植える前に根が乾き、少し枯れました。

月刊　こころのとも　第十二巻　七月号　（通巻一三九号）

平成十三年七月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660